

一口メモ

緩和ケアは、いわゆる終末期ではなく早期から行う。痛みだけでなく、全人的苦痛という考え方でさまざまな苦痛を探り対応し、余命を延長するという研究結果もある。全ての医療従事者が行うもので、困難な場合には専門の緩和ケアチームが対応する。

知りたい! 治療の最前線

緩和ケア

◇16

緩和ケアは、がんだけでなく、命の危険に関わるさまざまな病気が対象です。患者さんはもちろん、家族も対象になっています。終末期だけでなく早期に開始し、苦痛の緩和と予防も行います。

早期に始め苦痛防ぐ

富山大附属病院で行った緩和ケア研修会



梶浦 新也

富山大附属病院
臨床腫瘍部副部長

世界保健機関(WHO)によると、緩和ケアは「生命を脅かす病の患者と家族のさまざまな問題を早期に発見し、対応することで苦痛を予防し、和らげ、生活の質を改善すること」と定義されています。

決定権は本人

緩和ケアを早期から行う、とはどのようなことなのでしょう。家族ががんになったときのことを想像してみてください。

「本人に『治らない』などの悪いことは言わないでほしい、悪い話は身内だけににしておいてほしい」と家族から希望される場合があります。しかし、治療方針の決定権は本人にあり、正しい病状説明が行われないと、本当に本人が望む治療を選べない可能性があります。

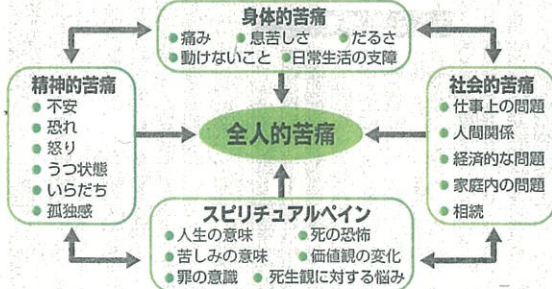
余命延ばす効果も

「しかし、深刻な病状をたて伝えれば、いわけでもありません。医療の現場では、このように「悪い知らせ」を伝えることが必要な場面があります。伝える際の苦痛を緩和するためのコミュニケーション技術が求められ、これも緩和ケアの一つです。早期の緩和ケアは余命を延長するという研究結果もあり、国も緩和ケアの重要性を認識しています。がん対策基本計画において「全てのがん診療医は緩和ケア研修を受けること」が挙げられており、コミュニケーション技術研修を含めた全国統一のプログラムで研修会が行われ、レベルの向上が図られています。

チームで対応

全ての医療従事者に緩和ケアの知識と実践が求められますが、1人のスタッフが全てに対応できるわけではありません。さまざまな医療従事者がチームとなって対応していくことが求められます。例えば、富山大附属病院にはがん相談支援センターが設置され「ほほえみサロン」というがん患者のサロンを運営し、外来診療で対応しきれないような悩みについての相談を受けています。

全人的苦痛



また、対応が難しいような強い苦痛を抱えている方もおられますが、そのような場合には専門家への相談が大切です。富山大附属病院の緩和ケアセンターには、緩和医療専門医、ペインクリニック専門医、精神科専門医、緩和ケア認定看護師、緩和ケア認定薬剤師などからなる専門の緩和ケアチームがあり、難しいケースに対応しています。

◇ 次回は22日に掲載します。